

まえばし市民ミュージカル実行委員会 制作

前橋空襲体験談より

私の戦中戦後体験

江田町 富澤 昭夫

私は昭和十三年九月生まれ。昭和二十年には国民学校に上がっていたはずだが、戦争末期の混乱した時代、学校の記憶はほとんどない。六人姉弟の長男だったので、色々と駆り出されていたのだらうと思う。

この江田辺りの人は小野里か富澤という名字の家がほとんどで、それぞれ『○○の昭夫さん』と言うように、屋号で呼び合っていた。仲が良く、何かしらの行事をするにも子どもから大人まで、みんなで力を合わせていた。子どもには子どもの役割がきちんとあって、歳が上の子が下の子に教えて、面倒をみたものだ。

我が家の前の道は宇佐美街道。今と違って真っ直ぐ南西に抜ける道であった。明治天皇が通った道だと鏡神社の碑にも記されている（明治十一年の北陸巡行）。神社で花火を上げる風習があつて、その作り方なども年かきの者から若い者に伝えられていた。獅子舞もあった。彼岸前の墓掃除も、みんなで行ったものだ。秋には茶碗に山盛りのご飯など収穫したご馳走を振舞い合ったり、正月に順番に風呂を沸かして湯を分け合うなんて事もしていた。今の若い人には考えられない事だらう。そうやって昔から、人が支え合って暮らしてきた場所なのだ。

そんな平和でのどかな村だったけれど、戦争も末期の頃は本土決戦、空襲に備えて防空壕を掘った。我が家の西側を流れる染谷川は、当時は護岸工事などされていなくて、真竹と篠竹が両岸に連なっていてうっそうとしていた。竹の根っこのはびこるところは地面が丈夫だからと、その更に下を人が入り込める大きな掘ったのだ。家々にあった蔵の白い壁も、黒く塗って目立たないようにしなければならなかった。

空襲の当日は走って防空壕に逃げ込んだ。みんな息を詰めて、音がしなくなるまでじっとしていた。長いような短いような、何とも言えない時間だった。壕から出て空を見ると、文字通り赤々と染まっていた。燃え落ちた街の様子や、亡くなった方の様子は直接目にしていない。子どもは行っ

ては駄目だと言われていたのだらう。大変な被害の状況は、後に聞いて知った。

戦中戦後は、農家をしていたおかげで食べ物には困らなかった。有難いことにひもじいと思うこともなかった。畑も田んぼも無事だったから、地域には大きな背負子（しよいこ）に米を付けて東京に売りに行く人もいた。わざわざ汽車賃をかけて売りに行っても儲けが出たそう。そうやって米を売り、向こうで魚の干物や昆布を買って帰って来たんだ。うちの時代も庶民は強い。

しばらくして、私が十三になるのを待たずに、父が亡くなった。自分は長男だったので、地域の集まりに顔を出さねばならなかった。皆で集まって味噌作りなどしていると、戦争で大陸に行った経験のある人が「中国の人に随分な事をしました」などと、ぼつりぼつりと話す瞬間もあった。多くは語れなかったのだらう。特に加害の体験は・・・。

本なら農家の長男なので、勢多農に行くわけだったが、父亡き後、自分は働き手として日々の農作業を優先しなければならなかった。何年か経ってから箕郷経営伝習農場（今の農林大学校）に行つて、効率的な農業について学ぶことが出来た。働きながら学ぶのは、当たり前のことだった。

今また、戦前かのような臭い空気が世界中に漂っている。私は既に八十も半ばを過ぎた老体ではあるが、子や孫、ひ孫の幸せのため、人が少しでも平和に安らかに暮らせるよう、今も地道に活動を続けている。どうか皆さん、再びの戦禍を被らぬよう、力による支配に頼らず、対話による解決を目指して日々を送っていきましよう。

私の戦争体験



平成二年二月十五日発行、「私の戦争体験」風化しない為に「第二集」より再掲

抑留・そして引き揚げ

下新田町 T・I

この前の戦争体験記には、戦争の終った八月十五日を追憶した。ここでは満州での抑留生活と、引き揚げまでの体験を綴ってみる。私より以上に苦しい体験をされた人々が数多くあり、それには比べものにならないと思うが、当時独身で比較的自由に行動出来た者の一人としての記録である。しかし四十四年も前のこととて記憶もうすれ、当時の苦しい体験が懐かしくなったり、風化して来ていることはいなめない。

全満の各方面から続々と避難民が、治安の比較

的よい撫順に流入して来た。撫順は満鉄の炭鉱や工場があり、自警組織も確立して、進駐して来たソ聯軍も、会社組織や街の行政体制をそのまま利用した。町の公共施設、会社の寮、集会施設、空き建物等はみな難民収容所となり、広い住宅は二、三世帯同居を余儀なくされた。学徒動員で新

京から来ていた私は、帰るに帰れずそのまま会社に残留した。住居は優雅な独居寮から追い出されて、社宅に転々と寄宿して用心棒的な役割を果たした。それは進駐当初のソ聯兵の一部が、日本人の家屋侵入、金品強要、婦女暴行等を行い、それに現地人の同調者が多かったからである。会社の仕事は石炭ガス製造で、水平炉やコークス炉前で灼熱の炎に身をさらし、煙りまみれの重労働を工人と共にやった。終業後は疲労した体に、家庭燃料

用として石炭やコークスを雑糞につめて運ぶ日々であった。そのためか、黄疽やパラチフスのような大病や、足の大火傷をしたが、寄宿先の方々の手厚い看病と、残存していた診療所医師等の治療によつて生きのびられた事を感謝している。暫時の平穩には子供達を集めて寺子屋をやったり、クラシックレコード鑑賞をしたりして越年したが、明日がみえない暗い日々であった。

駐在ソ聯軍は満鉄の工場施設、資材物資等を解体、徴発して本国に移送して引き揚げ、代わって八路軍が入ってきたが、それも長続きせず、国民政府軍がやって来るという情勢になった。そこで奉天に居る叔父達の消息を訪ねたいと思い、服を重ね着してその上に満服をまとって汽車に乗り込み、びくびくしながら奉天に行った。叔父は終戦後間もなく病没し、栄養失調の幼児二人をかかえ、狭い同居社宅に生活していた叔母をみた。慰め、励まして、準備が出来たら迎えに来ると、重ね着したものを脱いで置いて帰った。撫順で受入態勢を整えたころ、奉天が先に引き揚げがはじまり、叔母達は先に帰った。

三月頃か、国民政府軍が撫順に入城してくるという当日のことである。会社にいた八路軍の姿が消えた。一時空気がとまったような、ひっそりとした気配があつた。午後二時頃であつたらうか、急に喧噪が起こり、群衆が工場の倉庫を襲撃して掠奪をはじめ、またたく間に空っぽにした。嵐がおさまったと思われた頃、国民政府軍が隊列をくみ、鍋釜を天秤でかついで入城してきた。何か数時間の鮮やかなドラマであつた事か。

蔣介石の英断によつて日本人の引き揚げが行われたことは、本当に感謝すべきことである。撫

順でも四月頃からはじまった。会社では日本人の留用技術者の要請があり時の工場長に偶然にも満系の同級生が着任していて、奇遇と共に己むなく一年の残留を覚悟した。しかし、やや情勢の変化があり、彼を説得し、現場の管理者の同意をとりつけて、九月十八日頃引き揚げ列車に乗った。寄宿先の家族、幼児を助けて無蓋貨車にのり、途中投石妨害をうけながら数日を要して錦県について。収容所はアンペラ屋根のアンペラ囲い、アンペラ敷物の土間で、高粱飯、とうもろこし饅頭の僅かなものばかりで過ごすこと約一週間後、コロ島に行つて引き揚げ船に乗り込んだ。乗船前に頭から真っ白になる程、DDTをかけられた。これまで、のみ、しらみ、南京虫と共生していた体が解放され、ここで米国の科学技術の優位性をまず味わされた。船が岸壁を離れてやっと生きて帰れるという実感をしみじみと得た。

引き揚げ船は陸上収容所より一層狭いスペースで、丁度目差魚が横並びしているような有様で、上甲板から船底までの一番、二番、三番ハッチ皆人海の波の感であつた。それでも数日の辛抱、帰国の希望にみんな耐えた。船旅は順調で平安、多分三日目の夜明けに「島がみえる」の声に、船底からかけあがって、薄闇にボートと見える島蔭をくいるように見入った。着いた所は博多湾であつたが、残念ながら天然痘の発生のため、延び延びになつて、停泊四十日後やっと上陸した。一人伝染病発生すれば二週間隔離というきまりがあつて、発生のたびに落膽と怨嘆の声があり、上陸した頃には帰国の感激もうすれていた。争乱にあけくれる中近東やベトナムの難民、ボートピープルの情況と、私達の戦後体験を重ね合わせて考えるとき、現在日本の豊かで自由な生活に自戒反省をせまられる。

（注）難しい漢字には編集委員でかなをふらせていただきました。

